

2-5			
主題	認知症のご利用者が役割を持つことでの生活の変化について		
副題	もう一度主婦になろう		
キーワード1	BPSD	キーワード2	家事
研究期間	12 ヶ月		

法人名	社会福祉法人 浴風会		
事業所名	第三南陽園		
発表者：	山村幸子（やまむら さちこ）	アドバイザー：	金丸勇太（かねまる ゆうた）
共同研究者：澤崎玲奈（さわざき れいな）、仲山武（なかやま たけし）			

電 話	03-3334-2193	FAX	03-3334-2198
-----	--------------	-----	--------------

今回発表の事業所やサービスの紹介	社会福祉法人浴風会は、大正14年に関東大震災の被災老人援護を目的として設立された高齢者の為の保健・医療・福祉の総合施設です。第三南陽園は、平成14年に開設した3番目の特別養護老人ホームです。5階は、入所者定員40名（ショートステイ3名含む）の従来型の認知症専門フロアです。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

A様は自立心が強く、時々荒っぽい行動や言動がある。特に夕方になると表情が陰しくなり、その影響は周囲が不安を覚えるほどであった。消灯後も寝付きが悪く、他のご利用者とトラブルになる事があった。

一方で、簡単な仕事をした後は機嫌が良く、笑顔を見せることがある。ほとんどが家事に関連した仕事であり、自ら進んで引き受けることもあった。

B様は他のご利用者・職員に対しての愚痴、悪口がある。職員が“自立しているから”と積極的に関わろうとしなかったこともあり、信頼関係が築けていなかった。

一方で、散歩に出た際やテラスの草木を見て「田舎を思い出す」「懐かしい」と話す事や料理クラブの際に自ら手伝いに参加し「昔はよくやったの」と嬉しそうに話される事があった。

ご本人が望む事をするのが、その人らしい生活を送る上で重要であるのは明らかである。特別養護老人ホームという集団生活の場においては、個別に関わることはなかなか難しいことがあり、出来る限り個別で関われる様な取り組みをしていきたいと考えた。

《2. 研究の目的ならびに仮説》

ご利用者が穏やかに、自分らしく過ごして欲しいというのは私たち共通の願いである。

本研究の目的は、認知症ご利用者が施設生活において役割を持ち、個人の生活の一部を取り戻す事である。それによりBPSDが緩和する事を望み、生活環境の整備に取り組んだ。

《3. 具体的な取り組みの内容》

①対象者：ご利用者2名を対象として家事作業を行って頂き、実施状況を記録した。職員には2回アンケートを実施し、以前と比べてどう変化したのか調査した。

②作業内容：炊事、洗濯、掃除、裁縫、園芸

A 様：炊事、掃除

・炊事（米研ぎ、ぬか漬け）

木製の米櫃から 1 合の米を量り取り、研いでいただく。職員は炊きあがり時間を設定。炊けたご飯をよそっていただく。

園芸で収穫した野菜等を使ってぬか漬けを作る。毎日ぬか床を A 様にかき回して頂き、食べ頃になったぬか漬けは A 様に水洗い、切り分けを行っていただく。

・掃除（各食後と入浴終了後）

浴室の更衣室で掃除機をかけた後、モップ掛けをしていただく。リビングの掃き掃除、テーブル拭きをしていただく。

B 様：炊事、洗濯、裁縫、園芸

・炊事（米研ぎ、ぬか漬け）

A 様と同様

・洗濯（各食後）

使用後のタオル、エプロンを水ですすぎ、汚れを落としていただく。

乾いた洗濯物を畳んでいただく。

・裁縫（余暇時間）

職員付き添いのもと、布巾や袋を縫っていた。

・園芸（余暇時間）

田植え、苗植え、花植えを実施。その上で、日課として水撒きをしていただく。

③活動の成果を出すポイントになった点：

A 様、B 様の生活歴を見直し、お二人のやりたいことを模索した。関わる時間が増えたことにより、新たな一面を発見する事が出来た。

《4. 取り組みの結果》

A 様は、関わる時間が減った時期がある。この間、取り組みの前のように不機嫌でいることが多く、夜間の寝付きが悪くなった。

また、「あなたがやりなさいよ」と言って実施できなかった上、炊事、掃除以外に実施しても、それほどの効果は得られなかった。

B 様は以前から何でも「ありがたい」「ボケ防止になる」と言って喜んでいて。それでも、米研ぎやぬか漬け、園芸などは涙を流して喜び、他のご利用者への愚痴や悪口が減り、職員に対して自分から話しかける等の変化があった。

また、対象者以外のご利用者にも声を掛けながら行った結果、他のご利用者からも「私もやりたい」「持っておいで」といった声がかかるようになった。

職員アンケートより、「以前と比べてご利用者と関わりやすくなった」「声を掛ける工夫が出来た」など、意識が変わったことも窺えた。

《5. 考察、まとめ》

集団生活においても、ご利用者のその人らしさと役割を見つける事で個人の生活を送ることは可能であり、認知症のご利用者の BPSD 緩和にも効果がある事が分かった。

また、関わる時間が増えた事も BPSD 緩和に繋がったと思われるが、一人一人に合った関わり方にも研究の余地がある。今後の課題として活動を続けて行きたい。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認を取り、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

スー・ベンソン編、寺田真理子訳（2007）『介護職のための 実践！パーソンセンタードケア ― 認知症ケアの参考書』筒井書房

《8. 提案と発信》

介護施設の集団生活においてこそ、ご利用者の個性と役割を見だし、その人らしい生活とは何かを考える必要がある。これにより、BPSD の緩和も期待できると思われる。